

オリンピックの話題

第二十二回冬季オリンピック・パラリンピックがロシア・ソチにおいて開催されました。人間の力で制御できないような猛スピードでの滑降・滑走、またアクロバットのような跳躍と宙返り、さまざまな回転の技を見てみると、あるいは夏の大会の体操競技などもそうですが、もはやサーカスも影が薄く、人間の能力はどこまで伸びるのかという気がします。幼少時から競技への取り組みと身体づくり、すさまじいまでの努力の賜物でしょう。能力の限界に挑戦する選手らの姿を讃えたいと思います。

期待された人が振わず、下馬評に上っていなかった人が好成績を残すなど、さまざまなドラマですが、人間業とは思えないような技を披露する選手らもうら若い青少年であり、世界的な大会には慣れてはいても格段に違うオリンピックの注目度と周囲の期待が大き

近江神宮日供神饌講
新版第十八号
平成二十六年三月十日



第18回東京オリンピック記念切手

重圧となるのでしょうか。事前に騒ぎすぎて期待通りの成績が残せなければオリンピッククそのもののためにも良くないのではないのでしょうか。そのなかでも周囲の人々への感謝のことばを口にする選手が多いことはまことに有難いことです。

平成三十二年(二〇二〇年)の第三十二回夏季オリンピックの東京開催が決定しましたが、本年は昭和三十九年の東京大会

から五十周年になります。昭和二十年の敗戦から十九年という戦後復興が画期を迎えたころでした。オリンピック開催の準備とそれに合わせた数々の事業は高度経済成長のひとつの契機ともなりました。ことに東海道新幹線の開業はオリンピックの開会式のわずかに九日前の十月一日、滋賀県では琵琶湖大橋の開通はこの直前の九月二十



琵琶湖大橋開通式修祓の模様
(近江神宮から出向奉仕しました)

七日のことでした。開会式の十月十日は晴天の確率が特別に高い晴の特異日といわれる日を選んだといわれています。この日が後に体育の日として国民の祝日とされ、スポーツの振興と健康の増進に資する日となったのでした。

昭和十五年といえ、近江神宮の御鎮座の年ですが、この年に東京でオリンピックが開催されることになっていました。日支事変の深刻化に伴い準備も滞って、開催を返上することになり、振り替えられたヘルシンキもヨーロッパでの開戦のため中止となったのですが、この年は、東京で第十二回夏季オリンピックが開催され、札幌で第五回冬季オリンピックが開催され、また東京で万国博覧会も開催され、これらに合わせてテレビの本放送も開始されることになっていました。テレビ放送は戦火のため、十三年遅れることになったわけです。(昭和二十八年本放送開始)

太陽暦百四十年

昨年、明治五年の改暦によって新たな太陽暦の暦年が始まった明治六年(一八七三)より百四十年の年でした。明治五年十一月九日の太政官布告により、来る十二月三日を明治六年一月一日とし、

太陽暦を採用すると発表されました。同時にそれまでの、季節によって時間の長さが変わる不定時法を廃止して、現在と同じ定時法をもって時刻を表わすことになりました。官公庁・学校・軍隊などでは直ちに太陽暦に移行しましたが、特に当時の国民の大半であった地方農漁村にはなかなか浸透せず、明治四十二年までは官暦にも旧暦の日付を併記せざるを得ないのです。その後も地方では旧暦の習慣は根強く、戦後になっても伝統的な行事などは旧暦で行われたものも多かったのですが、昭和三十年代以降の高度経済成長により全国的な都市化、人口の流動化、また情報化とともに文化的な面でも全国一元化が進み、伝統行事も多くは太陽暦に移行し、それとともに陰暦は忘れられ、伝統行事そのものにも関心が薄れていきました。平成に入ると経済偏重への反省や伝統文化の衰退への危機感から、旧暦の良さが再認識されるようになり、近年は一種旧暦ブームといわれるような状況となっています。（旧暦は季節感に合っているなどという誤解も多いのですが）

明治初年、太陽暦採用に際してヨーロッパのグレゴリオ暦そのままの暦ではなく、立春を元日とする太陽暦を採用しようとする意見もありました。先進諸国と異なる暦をわざわざ採用するのは非現実的ではありましたが、当時の国情からいえば、従前の生活や生業との連続性や季節との正確な適合という点でも、その方が無理がなかったともいえます。

そして太陽暦採用後の官暦には十二直や二十八宿、その他の吉凶に関する暦註は文明開化を妨げるものとして記載されず、吉凶を知るためになかば非合法であった民間の暦が盛んに発行されました。六曜・九星・三隣七（三輪宝）など、現代に一般に知られる暦註の多くは、江戸時代以前に起源はさかのぼるものの江戸時代の暦に記載されることはなく、明治以後、太陽暦の時代になって盛んに行われるようになったものです。

「近江三都物語」

近江八幡市・安土城跡に隣接する安土城歴史博物館では、「近江三都物語」と題して、いずれも短期間ながら近江国に置かれた三つ



の都、天智天皇の大津宮をはじめ、奈良時代の聖武天皇の紫香楽（しがらき）宮、同じく奈良時代の淳仁天皇の保良（ほら）宮の都跡の出土遺物と関連文化財を展示する企画展が四月六日まで開催されています。その中で天智天皇の勅願寺であ

る崇福寺塔跡から出土し、近江神宮所蔵（京都国立博物館寄託）の国宝である『舍利容器』が出品されています。

春から初夏の祭典・行事

三月十七日	午前十一時	祈年祭
四月二十日	午前十時	例祭 勅使参向
四月二十日	午後二時	近江まつり子供みこし渡御
五月十七日	午前十一時	崇福寺鎮魂供養祭（崇福寺跡にて）
六月九日	午前十時	献茶祭
六月十日	午前十一時	漏刻祭
六月二十二日	午前十一時	献菓献煎茶祭
六月三十日	午前十一時	日供神饌講社大祭 饗宴祭
六月三十日	午後四時	大祓式

講社通信は近江神宮ホームページでカラーで見られます。

<http://www.oumijingu.org/> 「日供神饌講」ページ